

6 課

8月7日

家族の絆きずなの中に 休みを見いだす



安息日午後 7月31日

暗唱聖句

愛する者たちよ。それだから、あなたがたはかねてから心がけているように、非道の者の惑わしに誘い込まれて、あなたがた自身の確信を失うことのないように心がけなさい。そして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい。栄光が、今も、また永遠の日に至るまでも、主にあるように、アアメン。(2ペテロ3:17、18、口語訳)

それで、愛する人たち、あなたがたはこのことをあらかじめ知っているのですから、不徳な者たちにそそのか唆されて、堅固な足場を失わないように注意しなさい。わたしたちの主、救い主イエス・キリストの恵みと知識において、成長しなさい。このイエス・キリストに、今も、また永遠に栄光がありますように、アーメン。(2ペテロ3:17、18、新共同訳)

今週の聖句

創世記34章、ヘブライ11:17~22、申命記4:29、1ヨハネ3:1、2、創世記39章、エフェソ6:1~13

今週のテーマ

私たちは人生で多くの物事を選びます。しかし、家族を選ぶことはできません。完全な人はいません。そして、だれも完璧な家族や完全な家族関係を持つことはできません。神の愛を反映するような両親や兄弟姉妹、そのほかの家族に恵まれる人もいますが、多くの人々は、理想からはほど遠い家族の中に生きているのです。家族関係はしばしば複雑で痛みを伴い、私たちが不安に陥れ、傷つけます。さらには、ほかの家族が抱えきれなくなった感情という荷物を、私たちが代わって運ばねばならないこともあります。

私たちは、人生におけるこの避けがたい家族という領域で、どのようにして神の休みを見いだすことができるのでしょうか。今週は、機能不全に陥った家族にさえ、神が癒やしと心の休みを与えようと働いておられるのを観察するために、ヨセフと彼の家族の絆の物語をひも解いていきます。

ヨセフは機能不全に陥った家族を知っていました。曾祖父母アブラハムとサラの家庭で、すでに機能不全は始まっていました。不妊であることを知ったサラは、召使いハガルのところに入るようにアブラハムに進言し、妊娠したハガルはすぐにサラに対抗心を抱きます。このような環境で成長したイシュマエルとイサクはそれぞれ、自分の家族の中にも緊張関係を作りました。イサクがエサウを愛したため、ヤコブは父の愛と関心を得るために生涯を費やしました。ヤコブはだまされて2人の姉妹と結婚しますが、姉妹は仲が悪く、互いにヤコブの子を産むことで競い合い、召使いも巻き込まれてヤコブの子を産みます。

問1 創世記34章の出来事を詳しく読み直してみましょう。ここに記録されたすべての出来事は、この家族全体を、そして若いヨセフを巻き込んで、家族の関係と心にどれほど強い影響を与えましたか。

母親同士の対抗心は子どもたちにも飛び火し、彼らも競争心を抱いて成長したことでしょう。若く成人であったヨセフの兄たちは、すでにシケムの町の男たちを皆殺しにしていました。長兄のルベンは、ラケルの側女であり、ヤコブの子どもたちの母でもあったビルハと寝ることによって、年老いた父に自分の優位を示しました(創35:22)。やがてヨセフの兄ユダは、息子の嫁とは知らずに娼婦を装った彼女のところに入り、双子をもうけました(創38章)。

ヤコブは、ヨセフに高価な彩りの鮮やかな上着を与えるなど、明らかなひいきによって、この家族全体にくすぶる緊張の火種に油を注ぎました(創37:3)。もし機能不全に陥った家族があれば、その先祖の家族も同じように機能不全であった可能性があります。

問2 アブラハム、イサク、ヤコブはいずれも、道徳的に混乱した家族の中にいたにもかかわらず、なぜヘブライ11:17~22で信仰の勇者に数えられているのでしょうか。

神の信仰の勇者たちは、しばしば彼ら自身と神の期待を下回ります。彼らの家庭は崩壊していたにもかかわらず、ヘブライ11章に名を残しています。そのような困難な環境にあっても、信仰や愛を学び、家庭問題と格闘しながら神への信頼を学んだからです。

あなたは、どのような家族の機能不全を受け継いでいますか。その中でどのようにあなた自身を主に屈服させましたか。主はどのように、その機能不全の呪縛からあなたを解放してくださるでしょうか。

ヨセフの心は、奴隷として売られるはずのエジプトへの旅の途中、苦悩と複雑にもつれた兄たちとの関係、そして不安でいっぱいになりました。彼は涙をこらえながら、その決して平穏とはいえない旅を続けます。

「一方、ヨセフは、売られた隊商につれられてエジプトに向かった。隊商がカナン¹の国境に向かって南下したとき、ヨセフは遠方に父の天幕が張ってある山を見ることができた。彼は愛する父親のさびしさと苦しさを察して激しく泣いた。ふたたびドタンで起こったことを思い出した。彼は兄弟たちの怒りを見、彼らの恐ろしい目つきを身を感じた。泣き叫んで訴える彼に浴びせられた鋭い侮蔑の言葉が彼の耳に鳴っていた。彼は将来のことを考えて恐れおののいた。たいせつに扱われたむすこから、いやしい無力な奴隷になるとはなんという変わりようであろう。ただ1人、友もなく異国に連れられていく彼の運命はどうなることであろうか。ヨセフは、しばし悲哀と恐怖の念にかられて気が狂いそうであった。……

そのとき彼は、父の神のことを考えた。彼は幼いときから、神を愛し恐れることを教えられていた。彼は父の天幕の中で、ヤコブが逃亡者となって家を脱出したときに見た幻の話をよく聞いたものであった。……彼は今、こうした尊い教訓をまざまざと思い出した。……**彼はその時その場所で自分を全く主に捧げ、イスラエルを守るものが、流浪の地で彼と共にいてくださるように祈った**」（『希望への光』106ページ、『人類のあけぼの』上巻234、235ページ、強調付加）。

ある文化圏では、共同体の役割が個人よりも重んじられますが、別の文化圏では個人の役割が共同体よりも重んじられる傾向があります。聖書においては、これら二つの間に調和を見ることができ一方、そこには明らかに、集団としての神への献身と同じくらい多くの個人的な召しの記録があります。ヨセフは、神に従うという個人的な決意をすることによって、彼のもつれた人間関係に休みを見いだし始めます。

問3 次の聖句では、個人的な献身について何を教えていますか（申4：29、ヨシュ24：15、代上16：11、詩編14：2、箴8：10、イザ55：6）。

休みを見いだすために、私たちは各自神に従うことを個人的に決心しなければなりません。私たちの祖先が信仰の巨人であったとしても、信仰と霊性は遺伝によって受け継がれることはありません。神には神の子どもたちはいますが、神の孫たちは存在しないのです。

毎日、そして1日の中の一瞬一瞬、神に献身することを選ぶことはなぜ重要なのでしょうか。そうしないとき、あなたの人生に何が起きるのでしょうか。

創世記39:1は、「ヨセフをエジプトへ連れて来たイシュマエル人の手から彼を買い取ったのは、ファラオの宮廷の役人で、侍従長のエジプト人ポティファルであった」と記しています。脱走して家に帰るといふ望みが打ち砕かれたヨセフは、突然見知らぬ新しい言語と文化の中に投げ込まれたのでした。

家族や身近な人たちとの人間関係は、私たちの自尊心を育むためにとても重要です。ヨセフは、自分は特別な存在だと信じて成長しました。父が最も愛した妻の長子であり（創29:18）、実際に父のお気に入りの息子で、色あざやかな美しい上着を着ていました（同37:3、4）。

しかし、そんな彼は何者になったでしょうか。自由に売り買いされる奴隷です。取り巻く環境が、あっという間に全く別のものとなり、実にあっけなく人生が変わってしまいました。

ヨセフは、だれもが学ばねばならない教訓を学んでいます。自分の価値を他人の評価に頼るとき、大変な目に遭い、ひどく混乱することになります。私たちの存在や私たちの生き方を好ましく思っている人ばかりではないからです。私たちが担っている役割にではなく、神が私たちをどのようにお考えになり、どのようにご覧になるかに自分の価値を見いだす必要があります。

問4 神は私たち1人ひとりをどのようにご覧になりますか（イザ43:1、マラ3:17、ヨハ1:12、15:15、ロマ8:14、1ヨハ3:1、2）。

神は私たち1人ひとりを、恵みの色眼鏡でご覧になります。私たちが自分では想像もできないような能力、美しさ、そして才能を、神はご覧になります。究極的には、キリストが私たちのために死んでくださったので、私たち誰もが創造された時のようになれるのです。十字架は私たちの罪深さと、その罪のために支払われた大きな代価を示しながらも、同時に、神が私たちの中にご覧になる大きな可能性と価値を示すのです。他人が私たちについてどう考えるか、あるいは私たちが他人をどう考えるかによらず、神は私たちを愛し、罪の力からだけでなく、罪がもたらす永遠の死からも贖うために働いておられるのです。

そこで鍵となる問いは常に同じです。それは、私たちはイエス・キリストの中に表された神の愛という現実、どのように応えるべきかという問いです。

多くの団体や個人が、自分自身をありのまま愛しなさい、自分を無条件で受け入れなさいと言います。これはなぜ自分を欺くことになるのでしょうか。私たちの価値は外から、すなわち私たちを創造し、私たちの真の能力をご存じであるお方から来るといふ事実を知るとは、なぜ重要なのでしょうか。

ヨセフのエジプトでの物語は、初めのうちは順調に進みます。神に自分をゆだねたヨセフを、神は祝福し、彼が想像もしなかったポティファルの家における高い地位をお与えになります。主人のポティファルと非常に良い関係にあるように見え、家の中でも、農地でも、彼とほかの使用人たちとの関係は良好であるように見えます。しかし、すでに問題が起ころうとしていました。この家のある人物が不穏な下心を抱いていたのです。

問5 ヨセフはどんな人間関係の問題に直面しますか。彼はどのような決心をもって、この問題に向き合いましたか（創39：7～10）。

ヨセフは、ポティファルの妻との間に問題を抱えます。おそらくこれは、「ポティファルの妻は問題を抱えていました」と言い換えるべきでしょう。彼女は、他人は「物」にすぎず、みな自分の思い通りに「使える」と考えていました。彼女はヨセフを思い通りに「使おう」とします。ヨセフは「顔も美しく、体つきも優れていた」と書かれています（創39：6）。聖書はめったに人の身体的な特徴について触れることはありません。なぜなら、「人は目に映ることを見るが、主は心を見る」からです（サム上16：7）。この場面では、彼の容姿の良さは、神の原則に忠実であり、潔白であろうとする彼には助けとならず、むしろ障害となりました。

この邪悪な女の主張に対して、ヨセフは逆効果と思われる行動を取ります。彼はすべての人間関係に——この場合はポティファルの妻との関係に、聖書の原則を実践するのです。人間関係に対する聖書の原則は、時代遅れのものではありません。罪の結果に苦しむ者、つまりだれもが、そのことを証明できます。

聖書は、これは1回限りの誘惑ではなかったと述べています。ポティファルの妻はヨセフを何度も誘惑しようとしてきました（創39：10）。ヨセフが彼女の求めに応じない理由を説明しても（同8、9節）、彼女は受けつけません。

ヨセフは、他人の選びはコントロールすることができないことを悟ります。しかし、神に栄光を帰せるように生き、愛し、周囲にいる人々と向き合う決心をしました。ヨセフは、神の臨在の中で生きることをすでに学んでいました。この学びが、誘惑に屈しない力を彼に与えたのでした。

あなたに悪意をもって接してくる人も含め、すべての人間関係において聖書の原則を実践した経験がありますか。その結果はどうでしたか。マタイ5：43～48を読んでください。そのような生き方はなぜ重要だと言えるのでしょうか。

聖書のこの物語の記述を読む限り（創39：11～20）、ヨセフは原則に忠実な生き方のために苦しみます。彼は牢獄に投げ込まれてしまいます。ポティファルの所有物にすぎないヨセフは、問答無用でその場で殺されても仕方のない立場でした。ポティファルは明らかに彼の妻を信じていませんでしたが、自分の評判を守るために何か行動しなければならなかったのです。このようなひどい環境にあってもなお、「主がヨセフと共におられ」ました（同21節）。

この地上の人生は不公平です。善意が常に報われるとは限らず、悪が常にすぐに罰せられるとも限りません。それでも、良い知らせはあります。牢獄の中でさえ神が彼と共におられたので、彼は休みを見いだします。彼は自分の状況の不公平さを考え、心を閉ざし、神に見切りをつけることもできたはずでした。

問6 獄中でヨセフは何をしますか。周囲の人たちとどのように関係を作っていますか（創39：21～40：22）。

獄中でヨセフは、理想を求めず現実的に行動します。獄中は彼が望んだ理想的な環境からはほど遠いものでしたが、それでも彼は関係を構築し、人を助けます。自分が助けを必要とする弱い者であるということも恥としません。王の給仕役の夢を解き明かしたときも、ヨセフは彼に助けを求めます。

問7 パウロはエフェソ6：1～13で、人間関係についてのどんな大きな視点を示していますか。

私たちの人間関係は、各時代にわたって繰り広げられている神とサタンの間の争闘の縮図です。それは、この世に**完全な人間関係は存在しない**ことを意味します。サタンは、私たちのすべての人間関係、特に身近な人間関係を利用して、私たちの人生に対する神の意志を傷つけ、挫折させようとしています。しかし私たちは、自分1人でこのような戦いをする必要がないことに感謝しましょう。み言葉は、私たちの人間関係の原則を定めています。私たちに知恵を授けるとの神の約束は（ヤコ1：5）、私たちの人間関係にも及びます。そして、神がヨセフと共におられたように、私たちが複雑になった人間関係の中にあるときにも、共におられると約束してくださっているのです。

ヤコブ1：5の神の約束について考え、あなたの人間関係に知恵を求めて祈りましょう。どうすれば、あなたの人間関係において、聖霊の助けをいただくことができるでしょうか。

ヨセフとポティファルの妻との間に起きた出来事について、エレン・ホワイトは次のように書いています。

「ここに、地上に生きるすべての世代に対する模範がある……。神は今そこにある助けとなり、主の霊は盾となるであろう。最も厳しい誘惑のただ中であろうとも、すべての世代は、それらを用いて誘惑に対抗できるのである。ヨセフの道徳心に対する攻撃はどんなに激しいものであったことだろう。そのような誘惑も、初めは影響力の一つにすぎないが、やがてその多くは道を踏み外させるのである。しかしヨセフに対する誘惑は、なんと素早く、そして堅く退けられたことだろう……。彼は、彼に対する評判と関心を神の手にゆだねていた。しかし神は、不正に訴える者によって汚された彼の評判を守られ、後になって、神の良しとされたときに輝かせられた。神は監獄をさえ、ヨセフを高める場所とされた。高潔は時が来ればその報酬を刈り取るのである。ヨセフの心を守った盾は、神を畏れる心であった。それは彼を忠実へと導き、主人に対して正しくあらせ、そして神に対して真実であらせた。彼は、主人が事実をまったく知らなかったにもかかわらず、彼の信頼を悪用するような忘恩を忌み嫌った」(『預言の霊』第1巻132ページ、英文)。

話し合いのための質問

- ① 名目だけのクリスチャンや教養だけのアドベンチストは、私たちの人間関係に休みをもたらす助けとはなりません。「教養」だけのアドベンチストと真の信者との違いは何ですか。
- ② 教会に加わったばかりのある姉妹がいるとします。彼女には信者でない夫がいて、彼女は夫を愛していますが、夫は彼女の変化を好ましく思っていない。このような新しい教会員に対して、聖書の原則に基づいて、どのような助言ができるでしょうか。
- ③ ロシアの作家レオ・トルストイは、次のように書きました。「幸福な家族はみな似ているが、不幸な家族にはそれぞれに異なる理由があって不幸なのである」〔アンナ・カレーニナの法則〕。すべての家族がその程度の差こそあれ、みな機能不全に苦しんでいます。なぜなら、すべての家族は罪人から成っているからです。1人ひとりのみならず、自分の機能不全を家庭関係に持ち込んでいるのです。私たちはどのようにして、神の恵みによって、愛し、赦し、重荷を分かち合うといった聖書の原則に従いつつ、家族関係に癒やしをもたらすことができるでしょうか。
- ④ うまくいっていた家族の多くが、突然の予期しない悲劇を経験してきたことでしょう。そのようなときに、信仰にすがり、神の約束にすがるとは、なぜ決定的に重要なのでしょうか。特に物事がうまくいっているときに、そのような経験に霊的に備えておくことは、なぜ大切なのでしょうか。